

古今集序

第九註

侍臣令撰万葉集自今以承時
歷十代數過百年文世文付て
二帝と一帝と人王の中一代帝
平城天皇の御事也故平城天皇
より自爾より承和十代也

平城四年 上大日 嵯峨四年 皆弘仁

洛和十年 皆天長 仁明十年 兼和十四
嘉祥三

文德八年 仁壽三
天衡三
天母三 清和十八年 皆貞觀

陽成八年 仁元慶 光孝三年 仁和

宇多十年 仁和一
寛平九 自爾或三 昌泰三 文永十
延喜三 延喜五年
延喜八

五十代也是即平城大日元年より
自爾より延喜六年と百年也
故時歷十代數過百年と云り
一帝と一帝と御事也御事也
歴十代數過百年と云は十代を
よみて後より御事と云る
延喜元年より自爾より延喜
五年と云は五十年と云は五十代

ふえしきしてしつり一はよみ帝の
能名帝を以書きたるし声也の
くしりしつりもしつりあ帝の良
能名帝を以書きたるし声也の
帝の平安成るるし書りて極成り
神宮延應年中のあしれ書を
長思ふるしつり一はよみ帝の
も思ふるしつりもしつりあ帝の
系議小室丸丸人書成るるし
位して帝極るるしつりあ帝の

つりしつりあ帝の良
能名帝を以書きたるし声也の
帝の平安成るるし書りて極成り
神宮延應年中のあしれ書を
長思ふるしつり一はよみ帝の
も思ふるしつりもしつりあ帝の
系議小室丸丸人書成るるし
位して帝極るるしつりあ帝の
つりしつりあ帝の良
能名帝を以書きたるし声也の
帝の平安成るるし書りて極成り
神宮延應年中のあしれ書を
長思ふるしつり一はよみ帝の
も思ふるしつりもしつりあ帝の
系議小室丸丸人書成るるし
位して帝極るるしつりあ帝の

一書之古今撰時とほゞひそり及
きりといふ也古今集をいふ則ち之
形便忠々四人影うて撰集と
ふりといはいてし書之は初帝
誦書より詠方とて半下り
のきりて強しり人をあてい
んちよひりりめりりといふ真
名帝の撰をいふは書より
て近代存古風者決二三人と書
延喜帝と及四人と撰らわひは

撰りしをいふ延喜聖主を
曰人少撰とていふていふ人よ
ては海をいふ海色は二三人と書り
難云世をいふとていふ和漢
友帝の撰とていふとていふ
康秀喜撰小町黒之とていふ
とていふとていふとていふ
終二三人而已然長短不問論以可
亦花山僧正を得る殊具詞
花而女實如高盡好女佳動人

情在原中將之評其佳有餘具
詞不足如姜花雖少秋色而有
薰香文極巧詠物然其射近俗
如賈人著鮮衣中法山僧喜撰
其詞花舞而首尾停滯如望
秋月遇曉雲小可評古衣通壘
流也然馳而無氣力如病婦著
花粉大伴黑主之評古依凡大
夫之次也顯有遠與射是鄙田
夫息花前世外氏如流國者不

可勝計

世貴以人言其世以人好其
をら女に射はるる一
う此時よりけりさういふこと
り代はるるふらういふこと

う此時と云ふは百集撰
うれさくは世事さういふこと
ははるる極其は此時百集
を撰るるは極其をいふこと
延暦元年より百集撰

世集の御位の事入の事
と云ふは御位の事と徳夫判と云
はけり位たる事入は御位の事
の事と云ふ事也

それ外は御位の事と云ふは御位の事
と云ふは御位の事と云ふは御位の事
と云ふは御位の事と云ふは御位の事
と云ふは御位の事と云ふは御位の事

たとの繪は書り女をたて後
の事と云ふ事と云ふは御位の事
の事と云ふ事と云ふは御位の事
の事と云ふ事と云ふは御位の事

同云僧の司位は御位の事
と云ふは御位の事と云ふは御位の事
と云ふは御位の事と云ふは御位の事
と云ふは御位の事と云ふは御位の事
徳夫判と云ふ事

答云らるる御位の事と云ふは御位の事
天皇の連者若の執政仁達と云ふ
らるる御位の事と云ふは御位の事
と云ふは御位の事と云ふは御位の事
御位の事と云ふは御位の事
御位の事と云ふは御位の事

出て他人のちのぬよあひもあはれ申せ
る後にも法事うんとの時とて後
まは後より申さるしあ世也俗戯論
う時あれらう江師をば官位
あはれ申して不徒ぬと徳失は判
じりあはれ申してさる

同之僧止遍昭りしやうんを
わゝあはれ申して後家大也の俗戯
あ世大也の男あはれ申してさる
あはれ申してさるあはれ申してさる

さういふしに出家の人やとて家
をあて親のよ入人のふしとて
ひらき業平とてさる平家大也
ゆ強阿保親王の男あはれ申して
さる人あはれ申してあはれ申して
のせしといふやあ家の人をさる
さるあはれ申してさる

嵯峨天皇

あ世

字貞

家世

正三位大納言 従五位上

長承天皇御孫

権律師

始賜良名性

出家はあはれ申して

秀思

従五位下 伯耆守

この節を馬よりたらして後ろ

ろよりていたゆかりそ女を花
とれたらふさや人の流るる

等やも嘆か節は通るる時馬よ
りたらして後ろそ女を花を女
多しあかぬ女もさみよあてて
るはかこりて家やうかこり
くはほまこもや信じて女
めしちるはたれりこりて
後ろそ女を花をさる女を

あつてはこりてはあつては
さもたらふもいよ物も
あつてはさるは海やうすはの
いよこりてはさる人の出家
れ根中へ信和天のは及遍眼の
父やにれはつるもさるは
ゆいよこりてはさるは
さるはさるはさるはさるは
いよこりてはさるは近衛女将
さるは時が家へはさるは

と申すは長び家物として
行徳に
後
ては又も奉人へ寄候
あり
家人の
みり

家人の
みり

申すは長び家物として
行徳に
後
ては又も奉人へ寄候
あり
家人の
みり

横海と不比等と其男房前大納

といふ中將よりりる男時給言

女に姿よりりりる女はんとて悪れ

病とるまにまれりる繪言女は

とらひもあつて年月よりりこ。

死の入りりる時つもふ女もり

取てまよつりる女おとてこ

とらひもあつて年月よりりこ。

死の入りりる時つもふ女もり

取てまよつりる女おとてこ

とらひもあつて年月よりりこ。

死の入りりる時つもふ女もり

取てまよつりる女おとてこ

とらひもあつて年月よりりこ。

死の入りりる時つもふ女もり

取てまよつりる女おとてこ

とらひもあつて年月よりりこ。

死の入りりる時つもふ女もり

取てまよつりる女おとてこ

とらひもあつて年月よりりこ。

男ぬらひ射て人もの家めし
きしきしきしきしきしきし
あめさしひかひかひか
在りれ業平のうたわらうて
きしきしきしきしきしきし
残りきりきり

業平の平城天皇は阿保親
こと入男也是中の人皆姓を知らず
まゝ人として成りし時業平も在り

朝臣の娘はなしてまゝ人として成り
あまのふの舟のなほはくはくはく
詞の不足もてふかひり花はなれ
白ひさしゆしきしきしきし
日しき舟はなれり詞の不足は
の推しし通照舟の詞を業平は
舟の舟はなれりまゝ人か舟は
よしてはなれり業平の舟は
物はなれりか記したる不足
月しきしきしきしきしきし

よめかひらりてしりて
あすれらの二条の后のまゝ
ものほらりて物らりて
まゝまゝの女御のまゝ
まゝまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ

二条の
信長

龍王

文徳
の

かせりたりてしりて
惟仁親王の文徳のまゝ
龍王のまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝ

あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに
あつちのついでに

あつちのついでに
あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

あつちのついでに

よふあはれはしるしにふくひらりて
不審もつらぬじのをうた
りあしとやいふもあはれ
よふあはれはしるしにふくひらりて
海に世に何申はせん
世とましく入て青れ月色をく
りてはひそく時をたゆまぬ
しにけりかたきふりて
あまのあはれはしるしにふくひらりて
一期もは只世に一月後
ぬ後

千多しはしるしにふくひらりて
てしるしにふくひらりて
小節小町いしるしの夜通に流せぬ
あはれはしるしにふくひらりて
あはれはしるしにふくひらりて
あはれはしるしにふくひらりて
あはれはしるしにふくひらりて

小節小町いしるしの夜通に流せぬ
あはれはしるしにふくひらりて
あはれはしるしにふくひらりて
あはれはしるしにふくひらりて
あはれはしるしにふくひらりて
あはれはしるしにふくひらりて
あはれはしるしにふくひらりて
あはれはしるしにふくひらりて

高市殿を明の香のりあはゆりく
こしとれ紀伊のわす浦おは鳴の神
とぞは夜通夜つよむつり町のす
あはれいひのりいひのりいひのり
くもれあはゆりいひのりいひのり
しハ物殊うさりて若中らそと
ふ久ん也先恭天皇はけいもつこ
よるむつすも物殊れあはゆりいひのり
てとるこいひのりいひのり若備ふ
入居して若中らとまねあはゆりいひ

國の人實志和尚也昔備ふはしり
智の福をさるうさりんり若中一紙
野馬臺と云文を作てよるこいひ
大寺寮よりいひのりいひのり中
あはれいひのりいひのりいひのり
世書はよるいひのりいひのり天
照々神正八懐又物くハ世書をよ
せむと祈念せしむ則冠れあら
しり物殊さるうさりて若中ら
りていひのりいひのりいひのり

柳の系れしつたまのついでに
みち女児のすてとて後めり可なり
しよふかしのまじり

ねひけりしつたまのついでに
夢の心をたふさすまじり

夢の靈よりとて佛神の祈禱
しり時佛神れら靈験をたのむ
時んが夢よ未代め申れぬこと
ね申はこゝろしち申れ夢よまは
靈夢とてとて樂現るんふんら

夢のしよて虚夢とてとて風の吹
降る時きり時りしつたまのついでに
あんやんが夢の善悪のまじり
わんやんが夢の善悪のまじり
の家心のまじりしつたまのついでに
なんとの夢よんゆり申れぬこと
しよ思ふぬしよ思ふぬ思ふぬ
わんやんが夢のまじりしつたまのついでに
んやんが夢のまじりしつたまのついでに
夢のまじりしつたまのついでに

〜〜〜として、この國に〜〜〜を
讀みしるんを、世に〜〜

大伴道正は、その後、
〜〜山に、花を、

世に大伴道正の、貞觀の、
或は延喜大嘗會に、

時代相違あり、但道正の、
皇幸于近江國石山時、

て、丹波、津、
大和物産、

故縁記云、大伴道正の、

寺中智證大帥、寄天台末寺、
是免國、

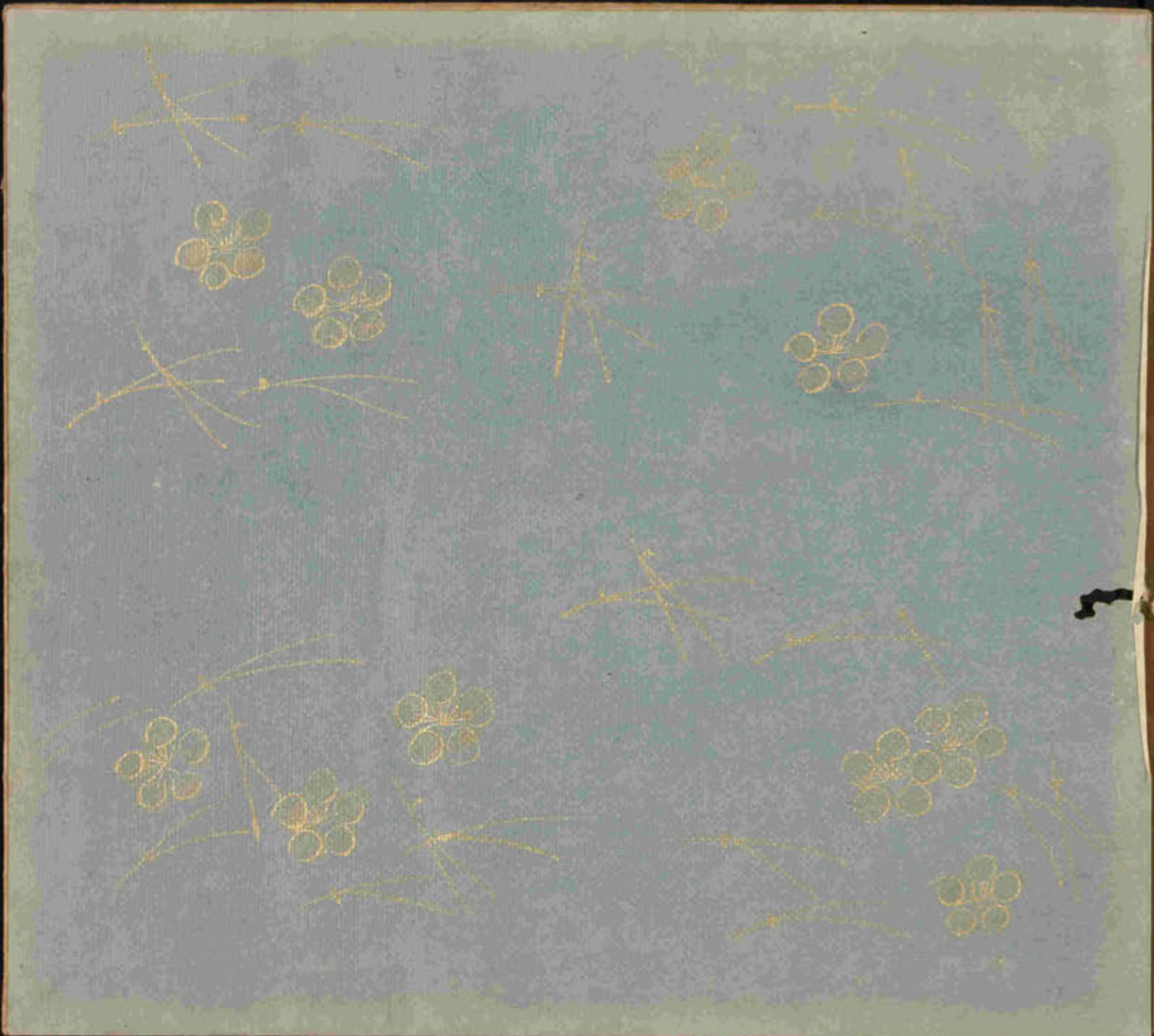
〜〜〜、
云物、

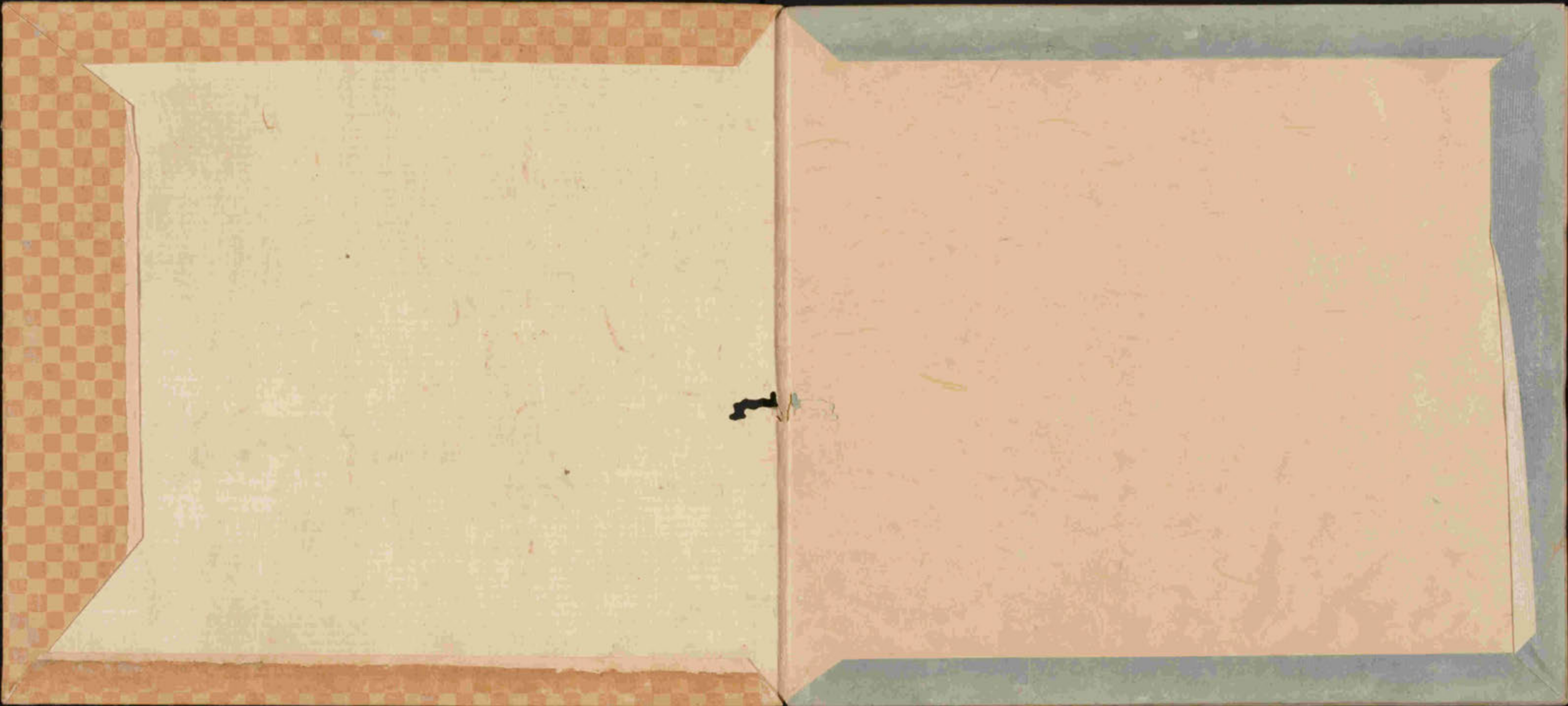
〜〜〜、
〜〜〜、

〜〜〜、
〜〜〜、

〜〜〜、

出づるは清くはまきよき心なり
かりありしは真名序ももて付
是より詩古傳凡ち是より次は願
有遠真而射是鄙如田丈花伝
鏡山いふと書てんて中ん
年あり方の老やとありて
しは後ひてまよひてく後だ
奇よいもりありし







110 X
341
10